

書画はその人を想う発信のツール

作業療法アーティスト koshiki さんへのインタビュー

“作業療法アーティスト”の koshiki さんは鹿児島在住の書画を専門としたアーティストである。平成 27 年 1 月 19 日付の南日本新聞（注 1）に紹介記事が掲載された。鹿児島県内のハンドメイドイベント、フリーマーケット、ショッピングセンター、雑貨店等で作品を展示販売し、活躍している。個別に作品の受注も行っている。その温かい、どこかほっこりする言葉と絵は人気があり、koshiki さんの作品を購入した一般人、歯科医院によるブログに掲載された感想から理解できる。インタビューにあたってインタビュアーに早速作品をプレゼントして下さった（図 1）。実際に作品を手にしながらいんタビューが行われた。koshiki さんは、普段は一作業療法士としてデイサービスで勤務しているという別の顔を持っている。koshiki さんの作品に触れたい方は、ブログく～作業療法アーティスト koshiki ～のところが病まない幸せなことば <http://ameblo.jp/koshiki1029> を参照されたい。



本誌：作業療法アーティストの koshiki さんにインタビューしたいと思います。また後でこのアーティスト名の由来を教えてください。この企画は作業をしている方にお話を聞いて人生にとって作業がいかに大切かということですか、その作業が他の人や社会にどのような影響を与えるかということを知るためにできたものでして、今年で 4 年目になります。

贈る相手を想って書（描）く書画

本誌：koshiki さんがされているアート、書画について具体的にどのようなものか教えてください。

koshiki：最初は字を書き始めました。字だけだと色合いが少し足りなかったので絵を描き始めて、字を一体化しました。人に伝えるという書画ですね。

本誌：書画は紙に墨で描いてらっしゃるのですか？

koshiki：そうです。筆ペンで。

本誌：筆ペンで書いて。絵は？

koshiki：絵はサイズの大きいのを描いて。それを縮小して、コピーを使って。字は全部肉筆で描いています。

本誌：この絵やメッセージはご自身で思い浮かんだものを書（描）くのですか？

koshiki：そうですね。贈る人を思いながら。

本誌：贈る人を思いながら書（描）くんですね。

koshiki：いろいろな種類を、200 種類くらい絵を用意して。足りなければその都度書き足して、加えて、絵を増やしていっています。

本誌：いつもは作業療法士として働かれていると思うのですが、アーティストとしていつ、どういう時に作成されているのですか？

koshiki：結構習慣的に描いていることが多くて。書こうかなあと思うときやイベント、母の日だったり、父の日だったり。次は敬老の日だったり、新年のメッセージだったりを随時書き溜めて、イベントごとに持っていったり、販売している感じですね。

本誌：書（描）いている時はどんな気持ち、どんなことを考えていますか？

koshiki：作品依頼があった時は、その方の背景だったりできるだけ考えたり、感じながら描くことが多くて。抽象的なもの時は漠然と、こういう言葉を手にとる人はどういう気持ちで取られるのかな、とかいう形だったりですね。まあ、メッセージはこういう人に贈りたいな、手に取って欲しいなと思って。その方に対するメッセージをいろいろイメージしながら書（描）いていますね。

本誌：作品というのは自分が思いついて書（描）くというのではなく、相手があって、その方に伝えたい、

届けたいということが多いですか？

koshiki : そうですね。

本誌 : 今回作品をいただいたのですが、これも私に対して考えてくださったんですね。ありがとうございます。

koshiki : そうですね。

本誌 : お話する前だと私は koshiki さんが頭に浮かんだアイデアとか絵や言葉を書(描)いて、それを購入する方が選ぶのかなと思っていました。関係性というか、相手を考えてその方のために作るのですね。

後輩、クライアント、家族、社会へ向けた書画

本誌 : この書画を始めるきっかけと今までに至る経過を教えてくださいませんか？

koshiki : 最初は高校の時に寮生活で、後輩とかが落ち込んだりする時に、こう言葉を直接かけるよりは何か書いてあげたりしました。それこそざら紙(し)の裏紙に書いてあげたりして、励ましたいなあとちょっとそういうのがきっかけで、ずーっと 10 代、20 代、ちょっとカッコいいかなと思ったりしながら(笑)、やっぱりすごいわけて嬉しかったです(笑)。今は仕事を始めて、統合失調症の方が自分の好きな言葉とか拾って欲しかったり、表現するという形で始めて。現在は自分が発信源になって、一般の方に言葉っていうものの力を発信できたらいいかなと思った書画が現在の形に至っていますね。

本誌 : そうなんですね。高校の時に落ち込んでいる方へのメッセージから作業療法士としての仕事の中でクライアントに伝えたりして今に至るんですね。

koshiki : そうですね。

本誌 : ご自宅に依頼されたものを作られているそうなのですが、ご家族の反応は何かありますか？

koshiki : またやってるよ、って感じですかね(笑)。

本誌 : ご家族にもプレゼントされるんですか？

koshiki : 嫁さんの誕生日だったり、子供の欲しいタイミングとかにあげたりしますね。

本誌 : いいですね。お父さんがこういうの作ってくださると。私は母の日に偶然ショッピングセンターで koshiki さんをお見かけしました。それと今のお話と合わせて書画というものの後輩からご利用者、クライアント、家族、一般社会の人まで発信されているのだということがわかりました。その発信を受けている方の反応はいかがですか？

koshiki : 作品展とか出店の時に近寄って来る方が興味を持っている方なんで、その方に発信をするだけなんです。誰でも声をかけて売れるようなものではないのでそのやりとりはしやすいですね。来て下さった方に真摯に言葉を贈るといった形なので。

本誌 : 話は戻りますが、後輩は koshiki さんがざら紙の裏に書いたメッセージを渡すとどんな感じでしたか？

koshiki : 喜んでくれたけれど後輩だから先輩からもらったものだから・・・まあ、その時はどうですかねえ(笑)。

本誌 : まあ、お年頃もありますものね。

koshiki : そうそう。

本誌 : クライアント、ご利用者さんはどうですか？一緒に書いたりされたと思うんですけど。

koshiki : はい、まあ最初の書画は、働き始めた時にやった書画は字だけだったので、絵を描くと更に良かったのかなと今振り返るとそう思います。その時は好きな、いろんな言葉集とか自分で選んで表現してもらいました。この人はこういう言葉が好きなんだと僕らも受け止めて。なんかそこに治療的なニュアンスで伝えていけたらなあと思って始めたのがきっかけです。

本誌 : 絵はもともと得意だったんですか？

koshiki : いや、絵はまだ 2、3 年です。得意じゃありませんよ(笑)。

本誌 : え、そうなんですか？絵をつけるようになったのはこの 2、3 年で、やはりこういうメッセージに絵を付けることで更にいいものになったという感じですか？

koshiki : タッチがいいですね。導入が、手に取る方の、結構リピーターで来て下さる方も絵は適当でもいいけれども、言葉がもう少しこういうのが欲しいと逆に言われるのがおもしろいところで。文が先か、絵が先かというのがあります。

本誌 : 今のこういう形、言葉と絵のセットになったんですね。

koshiki : そうですね。

本誌 : 世の中にはいろんな書画の作家さんがいて、私の職場のいろんなところに作品のコピーなどを貼っているんですけど、何かほっとするとか一度は立ち止まりますよね。koshiki さんは言葉が豊富そうなのですが、元々国語が好きとかそういう点はあるんですか？

koshiki : 国語は、偏差値 20 だったんですよ(笑)。本

を一切読まなかったんですけど。でも、仕事で得たものを発信する時に、言葉の種類が足りなくて。それから本を読み始めたり、いい言葉を貯めるようにしています。できるだけ自分の言葉で、今の形で発信しています。

本誌：ではこういう作業を始めることによって、言葉に触れる機会が増えたということですか？

koshiki：そうですね。

本誌：今の生活でもいろいろキャッチできるようにアンテナを張り巡らしている感じなのですか？

koshiki：そうです。

本誌：絵の素材というのもですか？

koshiki：はい。魚とか野菜、花、雑貨とか目に留まったものを描いています。まあ、こういう言葉を贈りたいという方がいて、この言葉にはこの絵が欲しいというのがあれば画材を持ってきて、描いて、付け加えたりしますけど。だいたい似たような感じの作品が多いです。絵を選んで、それに字を書くという感じです。

本誌：ちなみに私がいただいたこの絵はルービックキューブになっているのはどうしてでしょうか？

koshiki：組み合わせがたくさんあって、この面がやっと出揃うっていうのは何かのご縁。

本誌：なるほど。このメッセージと一致するんですね。ありがとうございます。こうやっていろいろ作品が作りあがっていくのですね。わかりました。



図1 koshikiさんからインタビュアーへのプレゼント

新聞取材後の作業の拡がり

本誌：私がこのアートのことを知ったのは、去年の1月の南日本新聞の記事でした。あれは結構うちの家族も見ていましたし、作業療法士仲間も見て

いて、話題になりました。取材を受けたきっかけは何だったんですか？

koshiki：その前の年の12月に天文館（注2）でのイベントに出していて、その時にふらっと来た方が「何か雑誌とかに載ったことがありますか？」って聞いてきたので、「いや、ないです」って答えたらその人が「わかりました」って。たぶん、その人が南日本新聞の知り合いの方にこういう人がいるってよ、って名刺を渡してくれたんですかね。そして南日本新聞社から電話をいただいて、「知り合いからあなたの紹介を受けました」、「で、どうですか？」、ってことで。「ありがとうございます(笑)」、と返事しました。

本誌：取材を受けて。結構反響がありましたか？

koshiki：そうですね。ちょうど作品を発信するには、いいタイミングで。活動を始めて1年くらいの時で取材を受けたのでラッキーでした。

本誌：取材を受ける前にフリーマーケットとかショッピングセンターや雑貨店での販売を始めていたんですね。

koshiki：フリマに出していたんですけどなかなか反響がなくて。作品もだいたい雑な感じだったので。そこから新聞に載ってからですかね、店に置いたり。僕は実家が甕島(注3)なので甕島で販売したり。イベントでやっている時、新聞記事を見て次のイベントの声が。それこそ村井さんが見てくださった店から声をかけてもらいました。それで呼んでくれて。

本誌：どうしてあそこのブースに出展されたのかな、と思って。声をかけてもらう感じなのですか？何気なくのぞいたらkoshikiさん、こんなに有名になったんだと思ったんです。その時、女の子とやりとりをしているところだったので声がかけれなかったんです。すごいと思って。これは結構自分から売り出していきじゃないですけど、発信していきたいと思ったんですか？それともしてみない、と言われたんですか？

koshiki：「してみない？」って言われて。ちょうど出していたフリマで3人くらい同じ形で詩を書いたりしている方がいて、僕だけ呼ばれる時に「タダでいいです」、って言ったら「タダなら企画が通りやすいから来てくれ」って言われて。ちょうど去年行って、今年も連続2年呼んでいただいて。母の日、父の日、連チャンで(笑)。

本誌：やはりそこで頼まれるんですか？例えばお母さん

にこういうの描いてくださいって。

koshiki : そうですね。母の日は結構若い夫婦とかが義理のお母さんにとって。そういう機会じゃないとなかなか若い方と一緒にやり取りをすることがないのでやっぱり楽しいですね。

本誌 : あの時も近くで見たかったですけど、その場で描かれるんですか？

koshiki : その場で。40人くらいに書(描)きました。1日で。

本誌 : すごいですね。

koshiki : 土曜は夜7時頃まで書(描)いて、予約を受けて、家に帰ってから作品作って、それから次の日に渡すって感じですかね。

本誌 : 結構ハードでしたね。

koshiki : でしたね。スピードが命ですから(笑)。

本誌 : ちなみにこういう作品ひとつを作るのにどれくらいお時間がかかるんですか？

koshiki : 作品、絵が描いてあれば字は1分あれば。

本誌 : ではいろんな絵が描いてあるカードを用意して、選んでもらうという感じですか？

koshiki : そうですね。

本誌 : 書く言葉は頼まれたものを書く、それともイメージして書くんですか？

koshiki : 依頼があればその言葉を書きますし、特に私に言葉を下さいというのであればもう少し話のやり取りをして、その場ですぐ書きます。

本誌 : そうやって作るんですね。依頼があって作る方がメインですか？

koshiki : はい、その場で贈ると注文があってお母さんにこういう言葉で、生年月日を入れて欲しいと言われたら持ち帰って、後からお渡しするような形ですね。

故郷・甕島とアーティスト名と書画

本誌 : アーティスト名がkoshikiさんですが、名前の由来を教えてくださいいいですか？

koshiki : 甕島の出身なので単純に。甕島の名前が有名にならないかなって思ったんです。新聞の依頼を受けて、載ってから甕島の港とか作品を置いてもらって。島の人が言葉で元気になってくれるといいな、と思ったりします。なかなか島は娯楽が少ないから。

本誌 : 先ほど甕島でイベントをされたとのことですけど、甕島を題材に描いたことはありますか？

koshiki : あります！甕島の長目の浜という景色と鹿の子百

合ですね。後は、作品は甕島だからというよりは誰でも手に取りたいような温かい言葉を(笑)。島に対してはなかなか外から情報が入ってこないからですね。そこへ発信していけたらいいかなと。

本誌 : 一時期甕島が国定公園に指定されてからすごく観光客が多くなったという話を聞いたのと、もう一つお土産が少ないので増えたらいいのになという話を聞いたので、そういうお土産にkoshikiさんの書画はいいんじゃないかと思いました。

koshiki : はい、そうですね。結構置いて下さってありがたいですね。

本誌 : 地元の甕島のご家族ですとか、友達の反響はありましたか？

koshiki : そうですね。親は私ที่บ้านで描いているのを知っていて、「島で手売りしてあげるよ」って感じだったんですけど。そこもまあ、家に持っておくよりも実家に送ろうかなって感じで始めて。新聞に載るまでは本当、ちょこちょこっと、1個2個売れたりするぐらいでした。でも、新聞に載ってからは何かの時に使ってもらえるような機会が増えて「おみやげに渡したいから」って見に来て下さった方もいます。5、60個の中から1個選んで買ってくださいような。

本誌 : そうやって一つの作業が広がっていているんですね。確かにメディアの力って大きいですね。

作業療法アーティストkoshikiと 作業療法士川添将太の関係

本誌 : 作業療法アーティストkoshikiさんと本名川添将太さんの間に違いはありますか？作業をする存在として違いがありますか？

koshiki : 川添将太は、うーん、作業療法士として働いている時は結構理由だったり、根拠だったり、しっかり考えながら働くことが多いんですけど、koshiki、作業療法アーティストとして描くときは勘だったり、直感で作品をずっと。やっぱりスピードが命だと思うんで、贈る時に。

本誌 : スピードが命なんですね。

koshiki : 考えて書かれるより、共感性があるんじゃないですか？話の途中で「わかりました(笑)」と早々に話を中断しながら書(描)いています。その場で書(描)くというのにかなりこだわっていますね。

本誌 : それでは結構時間との勝負ではないですけど。

たぶんいろんな作家さんがいて、じっくり考えるタイプとか即興タイプなどあると思うんですけど、koshiki さんはその時の状況で書かれるんですね。

書画は人に発信するツール

本誌：これからこの書画をどんな風に koshiki さんはしていきたい、発展していきたいな、というのがありますか？

koshiki：僕は社会人として作業療法士をしているんですけど、なかなか論文だったり、専門的な方への発信が僕はなかなかできなくて、それもコンプレックスがあるんでしょうけどね(笑)。でも、一般の方に向けてでも学んだことを発信していきたいというのがあって、普通の方が手に取って、自分で書いて、ほっこりしたりですね。人に贈って、またそこで連鎖したりしていったら、そういう形で広がっていけばいいかなって思います。作業療法士の中にも仕事がうまくいかないけど、趣味を連動させて、二足の草鞋を履いて、相乗効果で何か生み出したい方がいれば僕も一緒に話をしたりして、やっていけたらいいなあというのがありますね。

本誌：今の作業療法士の仕事の中でもこういう書画を利用者さんと一緒にしますか？

koshiki：ですね。言葉を書いたり、手紙を書いたりしていました。今はやってないんですけど(笑)。でも楽しいですよ。皆さん、喜んでくださるし、贈る相手がいらっしやらなかったりするのがなかなか難しいんですけど(笑)。家に飾っていても、好きな言葉であれば、ずーっと見ておけばですね。

本誌：そうですね。こうやっていただいたのも世界で一つしかないのももらったらすごく喜ばれると思います。ありがとうございます。それではこの書画は koshiki さんにとってずばり何でしょうか？どのようなものでしょうか？意味とかありましたら教えてください。難しいとは思いますが。

インタビューを終えて

私はある人の作業についてインタビューする時に、頭を真っ白にして聴こうと思うが、片隅に先入観があることは否めない。インタビューの中で触れているが、話しながら「あれ？あれ？」と良い意味で自分の先入観と語り手の話の間にずれが生じて来る。今回の koshiki さんの語りから贈り手を想いながら、作品を即興で作るという形式が私の先入観とのずれだった。koshiki さんに関してはじっくり考えて生み出した言葉や絵を相手に選んでもらうのだと無意識に私は想像していた。だから人への作業に関するインタビューはおもしろい。作業を知ろうとし、知識を積み重ねなければ、人の作業

koshiki：うーん。今、できる、人に伝える一番いいツールかな。僕にとっては、他の形だとうまく伝わらないんですけど。書画であればしっかりと伝えられるかな。気持ちとか、思いをですね。今の書画の形だと思います。今はデジタル中心の世の中だからこそアナログが最大限力を持ちますし(笑)。

本誌：人とか伝える先があって、伝えるというツールとして書画があるんですね。私は世の中にいろいろな書画があると知っていたけどそれ以外に何の知識もなく今回のインタビューに臨みました。こういう形があるということがわかって、koshiki さんがこういう思いを持って、作品を作っているんだということがわかってすごく良かったです。世界で一つしかない作品をいただいて、今日は本当にありがとうございます。

koshiki：2 個目も作りましょうか(笑)？

本誌：即興で！即興でできるというのがすごいですよね。

koshiki：即興でやれば結構何でも喜んでもらえますよ。逆に変な言葉でもすぐに書けば。

本誌：感動しますよ、いただいたとき。名前も書いて下さっているし。今日は本当にありがとうございました。

(注 1) 南日本新聞：南日本新聞社が編集・発行する鹿児島県の地方新聞。発行部数約 35 万 2000 部 (2014 年 1~6 月現在)。(Wikipedia より引用。2016 年 9 月 21 日アクセス)

(注 2) 天文館：鹿児島県鹿児島市にある中心繁華街・歓楽街の総称。(Wikipedia より引用。2016 年 9 月 21 日アクセス)

(注 3) 甕島 (こじきじま)：正式名称は甕島列島。東シナ海にあり、鹿児島県薩摩川内市に属する列島。甕列島ともいう。上甕島、中甕島、下甕島の有人 3 島と多数の小規模な無人島からなる。

(Wikipedia より引用。2016 年 9 月 21 日アクセス)

の多様性や核心が解明されていないということを再認識させられた。今回は私のために作品を用意して下さい。話を聞きながら、「これが私を想いながら作った世界で一つしかないものなのだ」と思いながら見ると素直にとっても感動した。koshikiさんの作業のキーワードは、相手を想う、発信、即興だと思った。近年、根拠やエビデンスの重要性を考えることが多い私には即興ということが新鮮だった。koshikiさんは書画の即興性にこだわり、即興が相手に喜ばれると言っていた。そしてkoshikiさんは書画がしっかりと人に伝えられる発信ツールだと語っていた。即興を構成しているのは何か？koshikiさんのインスピレーション、スピリチュアリティ、勘、直感、他にふさわしい言葉があるだろうか。私自身が贈り物に感動したようにkoshikiさんの作品に感銘を受ける人がおり、書画を手に入れるリピーターがいて、イベントのオファーが来る。これらの相関は何だろうか。作業についての疑問が沸々と湧いてきた。

koshikiさんは元々私の作業療法士の知人であったが、今回は作業療法アーティストkoshikiさんとしての作業について聞くことに努めた。それでも私があえて聞いたかったことがアーティスト名と本名では作業的存在として異なるか、ということであった。作業に名前があるように、人の名前によって作業的存在は異なるのか、あるいは単なる別名で変わらないのか。koshikiさんの場合は明らかに違っていた。

インタビュー後、koshikiさんの大切にしている作業のテーマについて新しく知ることができた。感動し、納得した。ここで紹介すると面白さがなくなってしまうので触れずにおく。koshikiさんの作品を手に入れる人にはきっとそれがわかるだろう。

(村井真由美)

